

第一章

序論

A. 問題の背景

日本語での書く指導は作文授業で実行されている。ある言語学の能力として、林（1990：75）によると、「作文学習には構造的に三つ能力が含まれる。すなわち；1）文字（かなと漢字）を書く力、2）文法的に間に合う語彙と文書を書く力、3）良い作文になる意見を書く力である」と述べている。外国人のための日本語での書く指導では、この三つのことが問題である。もし、第一と第二の問題は理論的問題と言えたら、第三のは実践的な問題と言えらると思う。

それから、岡崎（2001：107）は「作文の学習のグラデーションが三つの段階にできている。すなわち；初級、中級、上級である。この段階は大学生が持っている理論的なインプットと関係がある」と述べている。つまり、作文のグラデーションは大学生が持っている理論的なインプットによって発見されている。

グラデーションが上記のインプットとかその三つの段階に分けられていたのに、作文指導の目標が同じである。それは作文に意見を書き伝えることである。違うことは作文の種類とその作文に書き扱う

言葉である（話し言葉・書き言葉）。たとえば；上級の学習者は作文の授業で論文を書く学習し、中級の学習者はデスクリップチップとかナラチップとかなどの作文種類を書く学習する。初級の学習者は作文授業で理論的なインプット（漢字、語彙、文型）を使用して練習する。それで、初級の学習者は普通に教師に決定されていた漢字や語彙や文型で作文を書く練習している。

上記の説明に基づき、作文を書く指導のポイントは学習者の持っている言語学能力で意見を伝えるし、ある作文に書けるように学習していることと言う目標がある。その言語力は文字（かなと漢字）や語彙や文型でできている。つまり、作文能力は意味が二つある。すなわち；理論的と実践的な能力である。理論的な能力は；1）構造てきに間に合う言葉を使用するし、2）文字（特に漢字）を正しく書けるし、3）文法的的に間に合う文書を使用する。

それから、実践的な能力は、学習者がクラスで勉強した漢字や言葉や文型を使用する能力、ある面白い作文に書く能力を表す。それで、作文を書くことはある考え方のプロセスに関係がある。それは、本の意見（話題）を捉えて、テーマを決定して、テーマに関係のあるいろいろなこととかものを考えて、ある文書、作文、レポート、などを書いて始める。母語でも、第二言語でも、作文を書く指導のことは先のようなプロセスがある(ダナサスミタ、2009)。

また、実践的な学的能力としても、作文を学的能力は理論的な学的能力のに関係がある。意見を捉えて、テーマを決定して、意見を広げる活動は、勉強した言葉と文型を生み出して、新しい言葉と新しい文型とかその新しい使用する場面を考えることに関係があるから。それで、この研究の作文の評価のプロセスの中では、語彙と文書の合計が必要なポイントになっていく。

一般的に、第一言語学習としても、あるいは、第二言語学習としても、作文を書く学習は同じ問題がある。特に、実践的な問題である。すなわち、意見を捉えて、テーマによってその意見を広げて、うまく流れて、良い作文を書く問題である。違う問題が理論的な問題である。たとえば；インドネシア人の日本語の学習者ばあいには、漢字を書くとか適当な言葉を使用するとか適当な文型を使用する問題の影響があまり大きくない。

また、理論的に、作文指導は明らかな教材とか指導法があったのに、実践的に、その作文指導の目標と学習する活動がそういうではない。このような問題は教師に悪い影響がある。教師は作文を教えることがこわい（ステデイ、2008）。作文を教えると、漢字や語彙や文法を教えることと言う意見があるから。学習者のばあいには、作文のイメージが難しく、つまらない授業であるから。最後には、作文の授業にある学習者の興味も弱くなってしまった。（セテイアワテイ；2009）。

上記のような作文学習の問題を直すために、ステデイ（2008）はインドネシア教育大学で実験された作文学習についてレポートを書いた。ステデイによると、作文能力について、学習者が次のようなグループに分けられている。すなわち；

1. インドネシア語で作文が書けるし、日本語の作文能力もある大学生である。このグループの大学生は日本語で意見が伝えられて、間違いところが少ない大学生である（Aタイプ）。
2. インドネシア語で作文が書けるが、日本語能力がないので、日本語で作文が書けない大学生である（Bタイプ）。
3. 日本語で作文が書けないが、簡単な文が書ける大学生（Cタイプ）。
4. インドネシア語で、日本語で作文が書けない（Dタイプ）。

上記の学習者のタイプで、Cタイプは面白いと思っている。インドネシア人のインドネシア語で作文を書く問題と同じであるから。すなわち、学習者は理論的に、インドネシア語とか日本語のインプットがあったのに、作文がまだ書けない。敏夫と瞳（2002）によると、この作文のインプットは学習者のある文字、語彙、文型で、言語学の能力と言われている。つまり、作文指導は言語学のことばかりではな

く、言語学以外のこともある。それは考え方や意見に関係のあることである。

それでは、良い作文を書けるために、学習者は言語学能力がしか持たないが、他の言語学以外能力も持たなければならない。その言語学以外の能力は意見に関係のあることで、または、この問題の背景の最初に、実践的な能力と言われている。ドゥラーマン（ヘニアテイ、2006）は、インドネシア語の作文を書く学習では、このような問題もあると言う。

アルワシラ（2007）は書く指導の問題の原因を知るために、学習者にインタビューをした。その学習者によると、書く指導の問題はクラスの活動に関係がある。書く指導のプロセスをしているとき、教師は理論的なことを中心過ぎるし、学習者の書く意見をあまり中心しない。書き間違いをしてこわかったから、学習者は作文に意見を書いてこわかった。最後に、学習者がある言語学的インプット（漢字）、語彙、文型）をあまり産み出されなくて、作文を書く授業にある興味も弱くなってしまった。

上記のような問題をなおすために、何人か作文を書く研究者からいろいろなソリューションがある。たとえば；特別なアプローチ、教具、方法・テクニックを使用する。アルワシラ・（2007）はインドネシア語の作文を書く学習のために、コラボレーションテクニック、

ヘニアテイアテイ (2006) は $5W+1H$ テクニック、セテイアワテイ (2009) はプロセスアプローチ、ステデイ (2008) はストーリー絵とコラボレーション方法、ダヒデイ (2004) はモデリングテクニックを進めるなどのようなアプローチがしてさされている。みんな(アルワシラ・ ; ヘニアテイ、セテイアワテイ、ステデイ、ダヒデイ)は「作文を書く学習のもっと面白くて、優しくなるように、彼らが研究したその作文の教授法は良い」と言う。

$5W+1H$ テクニックについて、ア・マデイ (ヘニアテイ、2006) によると、このテクニックが作文を書く学習の実践的な問題にとっても役に立つ。このテクニックは意見を広げに關係のある情報を含めるから。たとえば ; 第一の W は英語の質問の言葉の *what* である。この質問の答え物はある作文の本意見になれる。また、他の質問の答え物はその本の意見の広がり物になれる。その以外に、 $5W+1H$ に含んだ質問の答え物のある關係には、ある作文の流れになれる。つまり、 $5W+1H$ テクニックは学習者の作文の実践的な問題 (意見に關係のある問題) がゆっくりなくさせれると思う。

上記の研究結果から、特にヘニアテイ (2006) の研究に興味があるので、作文を書く学習について実験研究を試みる。すなわち ; $5W+1H$ テクニックで作文を書く学習である。この研究はスマラン国立大学で実行される。スマラン大学の日本語学科では、作文授業

は3段階に分けられて、初級、中級、上級である。各段階の教材を中心に、この研究を大学生三年生に実験することにする。

B. 問題の設定と範囲

1. 問題の設定

上記に書いている問題の背景とそのデスクリプションを中心に、次のような問題の設定を書く。

- a. *5W+1H* テクニックを使用するまえに、スマラン国立大学日本語学科の三年生の作文を書く能力はどうであるか。
- b. *5W+1H* テクニックを使用しているスマラン国立大学日本語学科の三年生の作文を書く能力はどうであるか。
- c. *5W+1H* テクニックを使用するまえとそのテクニクを使用している学習者の作文を書く能力はどう違いがあるか。
- d. *5W+1H* テクニックで作文を書く学習について、学習者はどんな意見を述べるか。

2. 問題の範囲

それから、上記の問題設定に基づき、問題の範囲は次の通りに制限する。

- a. この研究は、作文を書く学習に $5W+1H$ テクニックを実験することである。
- b. この研究は、スマラン国立大学で行い、サンプルが三年度の大学生である。
- c. 教授内容は学習者が勉強した教授内容から取り付けられ、今学期の教授内容と適当にされている。
- d. 上記の問題の背景に基づき、この研究の評価は作文の実践的な側面（言語学以外こと・意見に関係のあること）をもっと中心されている。

C. 研究の目的

上記に書いている問題の設定に基づき、この研究の目的は次の通りに書かれている。

1. $5W+1H$ テクニックを使用するまえに、スマラン国立大学日本語学科の三年度の大学生の作文能力を記述する。
2. $5W+1H$ テクニックを使用しているスマラン国立大学日本語学科の三年度の大学生の作文能力を記述する。
3. $5W+1H$ テクニックを使用するまえとそのテクニクを使用している学習者の作文能力はどう違いことを記述する。
4. $5W+1H$ テクニックで作文を書く学習について、学習者が述べた意味を記述する。

D. 研究の意義

1. 実践的意義

実践的意味とは三つにできている。すなわち；

- a. 作文を教える教師には、クラスでこの研究で実験するテクニックを使用してみる。
- b. 学習者には、特に実践的な作文を書く問題（意見に関係のある問題）があったら、この研究の *5W+1H* テクニックを使用してみる。
- c. 他の研究者には、特に作文を書く方法に興味があったら、先行研究として、この研究を使用される。

2. 理論的意義

理論的意義とはこの研究で含んでいる知識的なことである。

すなわち；

- a. 選択的な外国語教授法に貢献を与える。
- b. 作文を書く *5W+1H* テクニックについての知識を増やす。

c. 教授の目的を達成するための理論の発展に貢献を与える。

E. 研究で扱う用語定義

1. 作文指導

作文を書くとは他の人に意見を伝えることで、相手に話していることと同じである。違いはその意見を伝え方である。話すことは直接に相手に向けたら、書くことはそういうでなく、作文のような道具を使っている。話すことより、書くことのほうが難しい。つまり、作文を書く学習ことは言語学に関係があることでなく、しかし、言語学以外に関係もあることである。すなわち、意見に関係があることである。それで、作文指導は学習者に「意見を広げながら、言語学能力を高めること」ということを教えさせれる。

2. 書く学習のテクニック

タリガン（2008）によると、言語学習では、用語のテクニックが学習方法と同じで、実践的なことである。学習方法とはある特別なアプローチと教授法による実践的な学習仕方である。

3. 5W+1H テクニック

アッセカフ (エルメント、2005:96) はインドネシア語の書く学習のために、この英語の用語の5W+1Hをインドネシア語へ訳して、ある作文を書くことに関係のあることを説明する。すなわち；

W h a t = a p a (なに)

W h o = s i a p a (だれ)

W h e r e = d i m a n a (どこ)

W h e n = k a p a n / b i l a m a n a (いつ)

W h y = m e n g a p a (なぜ)

H o w = b a g a i m a n a (どう) である。

作文を書くことには、この六つの言葉は意味が二つである。

ある記者には、この六つに基づき、意見を広げられる。それから、作文を読む人には、作文の内容がもっと分かりやすくなる。

作文を書く学習のためには、一般的に、「W h a t =なに」が作文のテーマ、「W h o =だれ」がそのテーマに関係がある人々、「W h e r e =どこ」がテーマに関係がある場所、「W h e n =いつ」がテーマに関係がある時間、「W h y =なぜ」がテーマで含む原因—結果の関係、「H o w =どう」がストーリーの流れを表す。第二言語学の作文を書くことには、この六つの質問を答えてみたら、

直接に自分の理論的な言語学能力を高めることができる。実践的な
的に、学習者はこの六つの情報で本の見解を広げられる。つまり、
作文を書く学習者は $5W+1H$ テクニックを使用したら、見解を
広げながら、言語学能力（漢字、語彙、文型）を高められる。

F. 研究の仮説

仮説とは三つにできていて; *hypothesis*、*antithesis*、*synthesis*である（マラカ、2009）。ある研究をするまえに、ある研究者は科学的な動機の研究の基礎がある。それは *hypothesis* である。その *hypothesis* が正しいかどうか、科学的に検証されなければならない。これこそは *antithesis* である。この検証するプロセスの結果は *synthesis* と言われている。この研究について、研究者は「 $5W+1H$ テクニックは学習者の作文を書く能力を高めることができる」仮説がある。それで、作文を書く学習には、研究者はこの $5W+1H$ テクニックを使用するのを指摘する。もっと明らかになるように、この研究の仮説は次の通りである。

H_i $5W+1H$ テクニックは作文指導に効果がある。

H_0 $5W+1H$ テクニックは作文指導に効果がない。

G. 研究の構成

この研究のレポートは章が五つに書いて分けられている。第一章；問題の背景、問題の設定とその範囲、研究の目的、研究の意義、研究の仮説、研究で扱う用語定義、研究の構成でできている。

第二章には、理論的考察に関係が有ることを書かれる。この理論的考察は；書くこと、外国人のための日本語学の書く学習 すること、スマラン国立大学で作文の学習法・学習法、先行研究でできている。

第三章には、研究方法に関係があることを書かれている。この研究方法は；研究の方法、研究の対象とそのサンプル、研究の道具、データの収集技法、データの分析方法、実験する教授、評価方法でできている。

第四章には、データの分析について説明されている。すなわち；プリーテストのデータのデスクリプト、ポスターテストのデータのデスクリプト、データの分析。それから、第五章には、研究の結論に関係があることを説明されている。すなわち；研究の結果とその結果に関係がる研究者の指摘こと。

